

はる き よしもと ふるでら
春木芳元遺跡古寺地区の調査



写真7 春木芳元1号石棺

所在地：別府市大字北石垣字塚原

調査の情報

調査主体：別府市教育委員会

調査期間：平成18年（2006）2月13日から3月11日

調査担当者：永野康洋（別府市教育庁生涯学習課 調査当時）

報告書情報：2007『春木芳元遺跡古寺地区』別府市教育委員会

報告書担当者：下森弘之（別府市教育庁生涯学習課 報告当時）

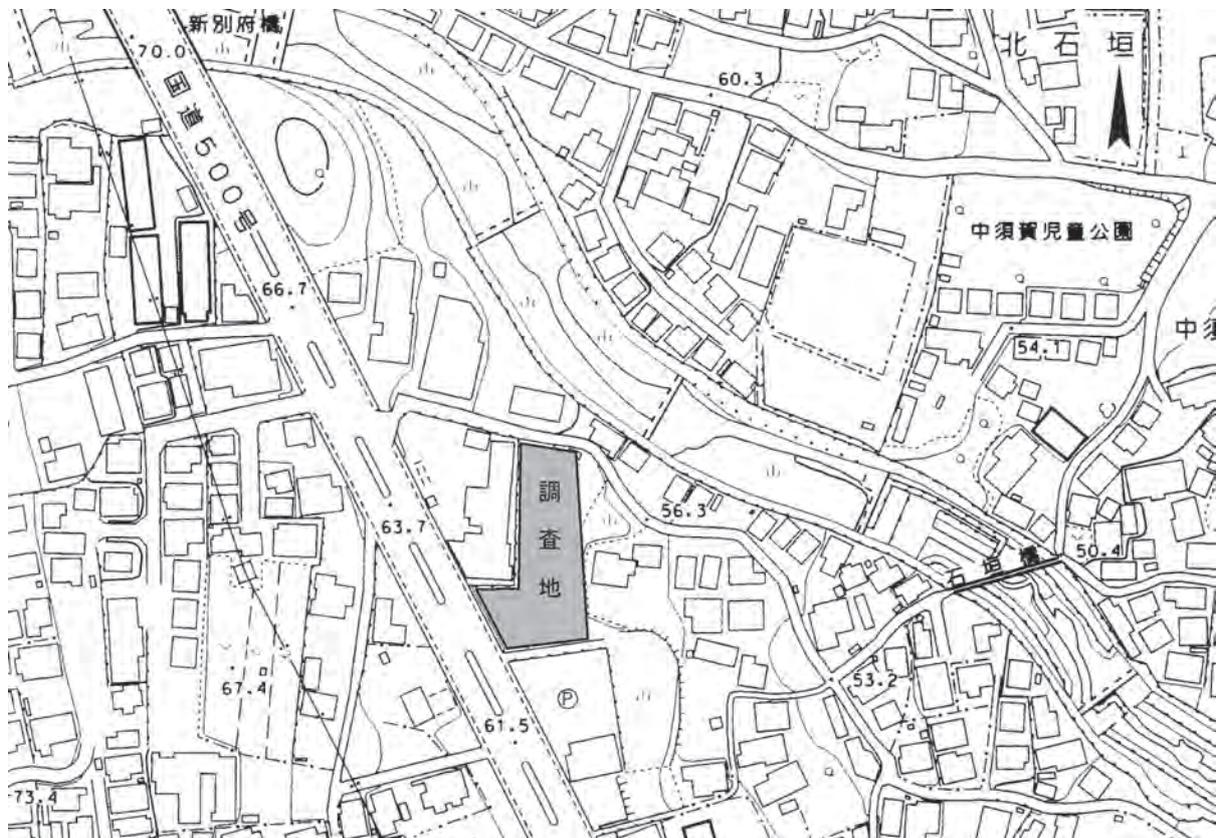
第3章第3節1で報告する春木芳元遺跡古寺地区の発掘調査の結果は、平成17年度に行われた別府市教育委員会による調査成果（2007『春木芳元遺跡古寺地区』）を掲載するものである。掲載にあたり本書の体裁にあわせるため若干の修正を加えている。

第3節 関連遺跡の調査

1 春木芳元遺跡古寺地区

調査の概要

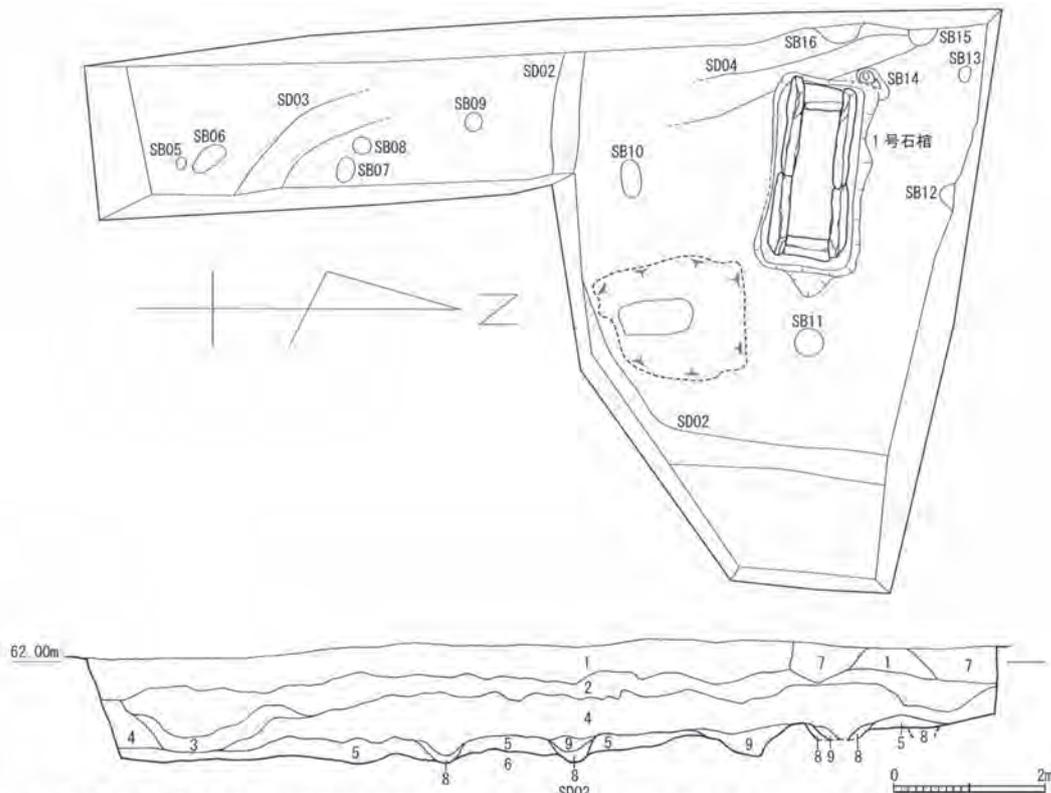
調査区は、春木芳元遺跡の一部、標高 60 メートルほどの春木川と国道 500 号線の間位置する。西側を通る国道からは、2 メートルほど低くなっており、すでに削平されている。調査はまず重機により既存建物を避け 4 箇所の特レンチを設定し掘り下げを行った。その結果第 1 トレンチと第 2 トレンチの表土下 1 メートルほどのところから箱式石棺を検出し、さらに第 1 トレンチの周辺からは周溝と弥生後期の包含層を確認した。周溝と箱式石棺に共伴すると考えられる須恵器等から第 1 トレンチの箱式石棺は 5 世紀後半に営まれた径 6 メートルほどの古墳の主体部と考えられた。従来別府市域の古墳は 6 世紀末から 7 世紀初頭のものだけが知られており、この時期の古墳は初めて確認された。石棺内部からは、鉄刀、鉄剣、鉄斧、小玉などの副葬品が検出されているが、これらの所見は、次項以降で述べることにする。調査区には、まだ石棺がある可能性があるが、本土木工事が駐車場建設のため、ほとんどが盛土工事となるため、基本的に遺跡自体を埋土保存することとした。しかし、当該石棺は別府市域における古墳時代中期の遺構としては極めて貴重な発見であるため、石棺が検出された区域を中心に特レンチを拡張し、別府大学文化財研究所に委託し石棺及びその周辺の実測を行った。実測終了後 2 基の石棺を実相寺古代遺跡公園内に仮移設し現場での調査を終了した。



第 72 図 調査地域図



第73図 調査区配置図 (1/300)



1. 表土
2. 黒褐色土（硬く締まる。1cm前後の小石を含む）
3. 黒褐色土（キメ細かく軟らかい。明黄褐色ブロックを含む）
4. 黒色土（古墳時代遺物包含層。キメ細かく軟らかい）
5. 暗茶褐色粘質土（古墳時代地山。キメ細かく締まりが強い）
6. 明黄褐色砂質土（キメ細かく締まりが強い）
7. 黒褐色土（カクラン）
8. 暗茶褐色粘質土（キメ細かく軟らかい。黄褐色ブロック含む）
9. 黒褐色粘質土（キメ細かく軟らかい）

第74図 第1調査区遺構配置図 (1/100)

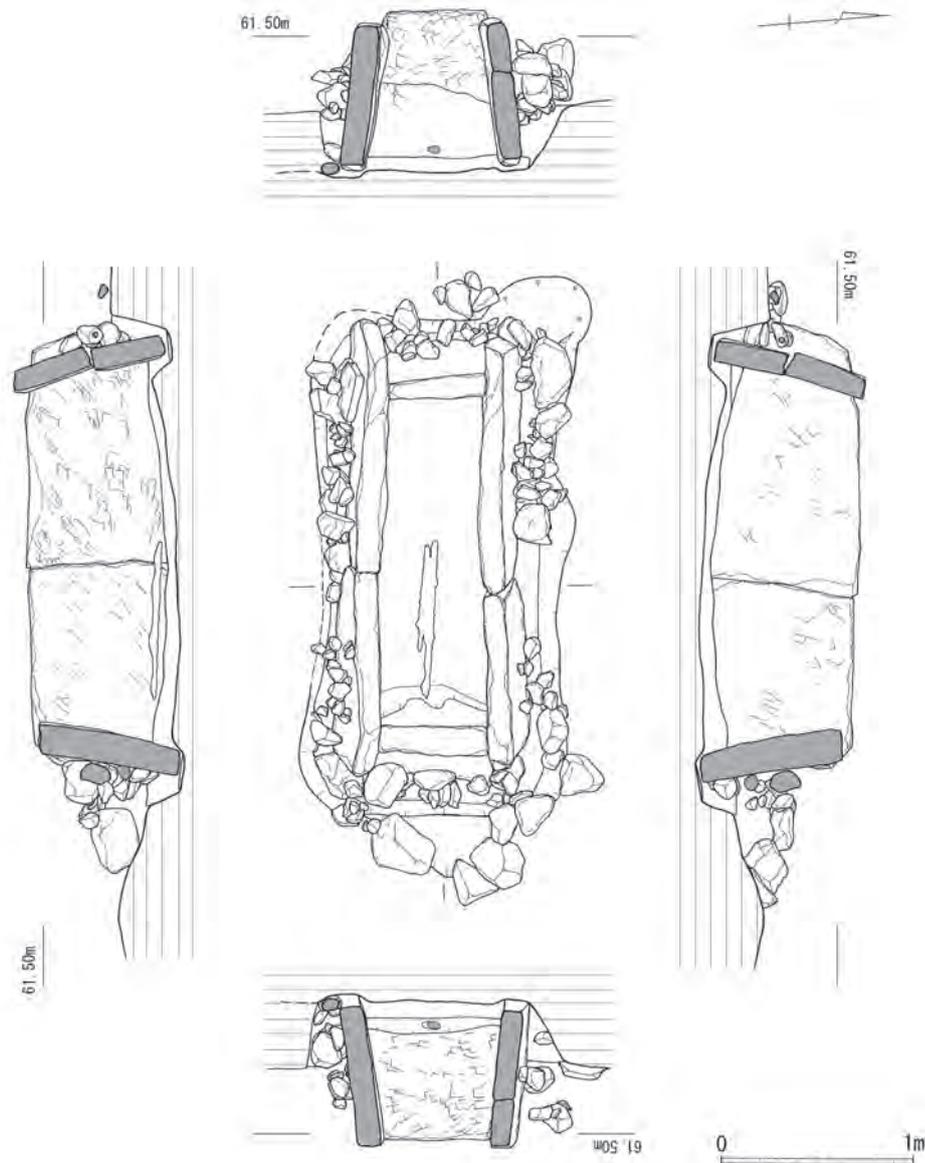
遺構と遺物

(1) 第1調査区

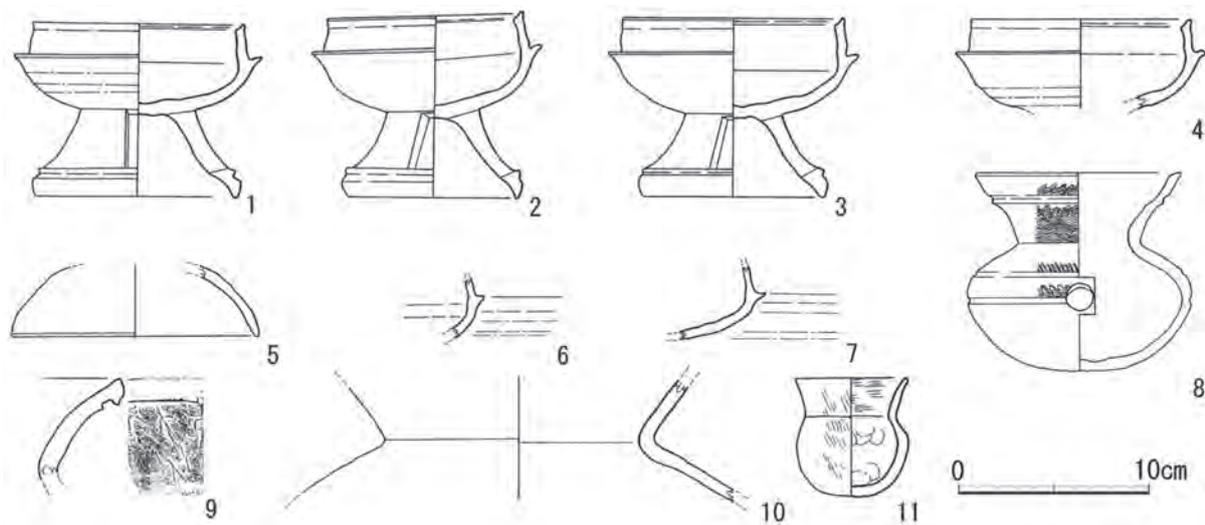
調査の結果、第1調査区からは組み合わせ式の箱式石棺、周溝、柱穴を検出した。周溝は、1号石棺に伴うと思われるSD-02の他に2本検出した。SD-03は調査区南側から北東方向に巡る。SD-04は調査区西側壁面から一部石棺西側と切り合う状況で検出したが、1号石棺との時期的な前後関係を明確にすることはできなかった。

(2) 1号石棺

主体部は、主軸をN-95-Wに向けた組み合わせの箱式石棺である。法量は長軸2.3m、短軸1.0m、高さ0.8mを測り、西位から東位に向かい若干広がる。棺は、6枚の約0.1mを測る肉厚な凝灰岩質安山岩を使用した板状の割石を壁側に2枚ずつ、両小口壁に1枚ずつ立て並べている。石棺の蓋は、検出時にすでに無く、棺内部に腐植土が流入している。棺材は、壁材、小口材共に若干内側に傾斜するように立てられ、拳大から人頭大の礫により裏込めがなされている。壁面棺材は長方形を呈し、それぞれの小口側では先端部上下両端共に打ち欠きを行い、略三角形に成形している。小口棺材は、壁面棺材の傾斜に合わせてように台形を呈している。各板材同士は、粘土目張りで隙間を埋められた様子はなく、裏込めに石棺材の剥片などが混じっていたこ



第75图 1号石棺 (1/40)



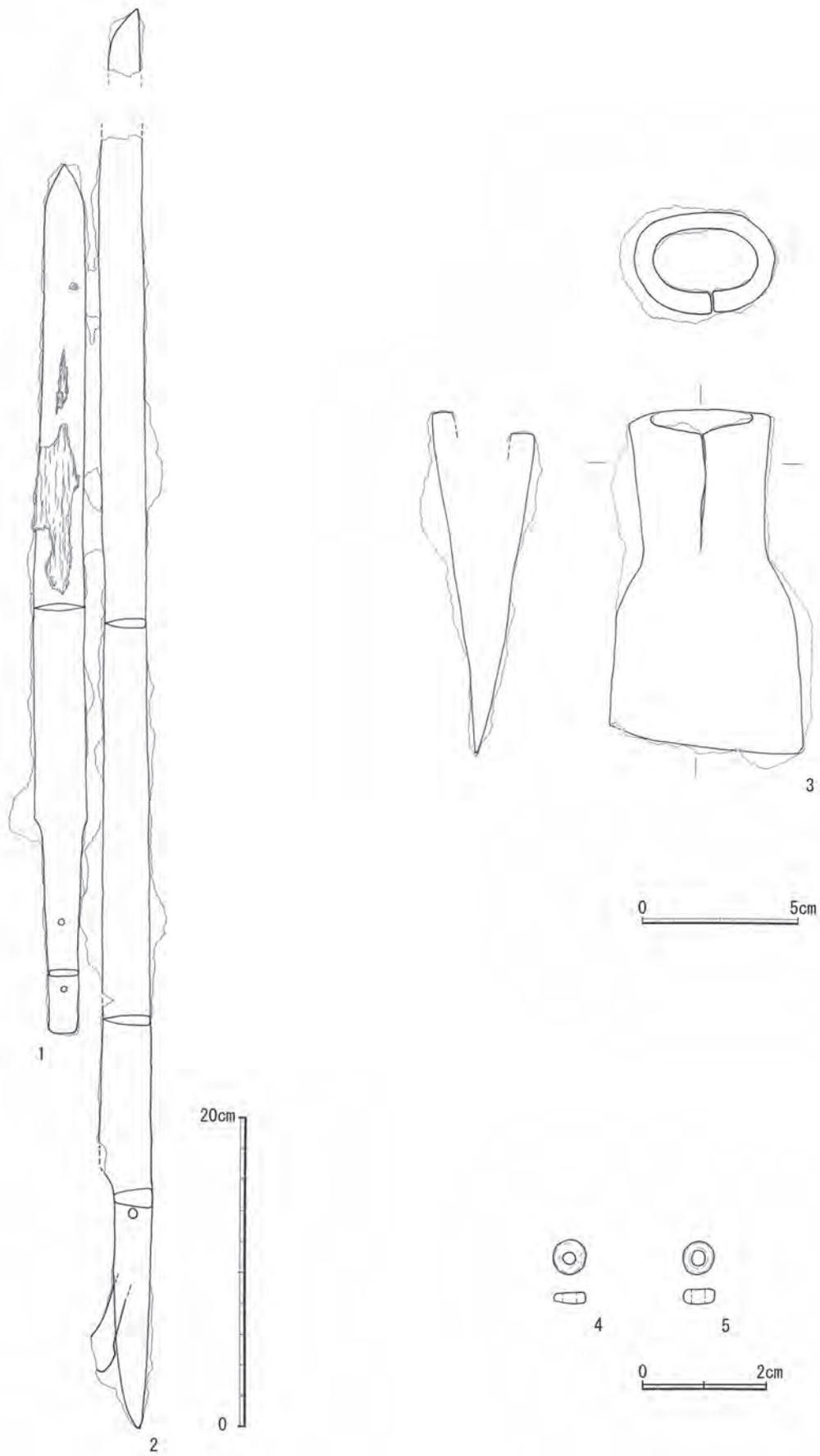
第76图 1号石棺周边部出土遗物 (1/4)

となどから、現地で最終調整を行い、石材を組み合わせていたと考えられる。棺内部は、赤色顔料が塗布されている。床面には、粘質土が敷き詰められ、東側に枕状の若干の高まりが確認できる。石棺墓抗は長方形を呈し、長軸 2.6m、短軸 1.3m を測る。壁面は垂直に掘り込まれず、下方にいくにしたがい内面に傾斜をする。底面は周囲に若干の窪みを有し、棺材の下受けを形成する。

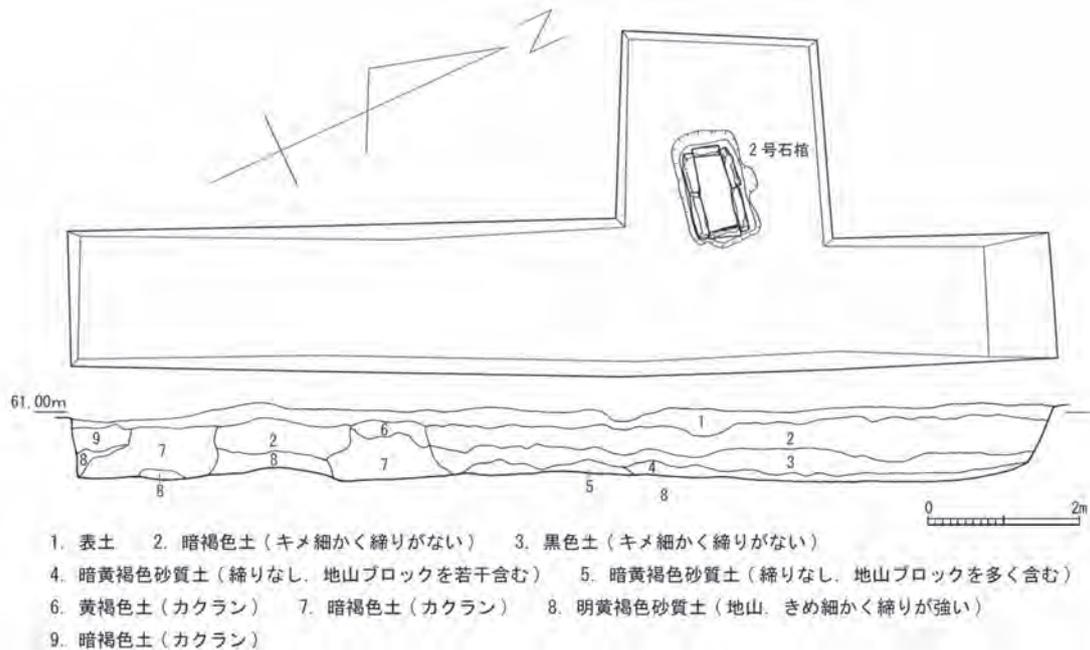
周溝 (SD - 02) は、石棺から約 3m 離れた位置で検出し、石棺を囲むように隅丸方形を呈す。周溝断面は逆台形を呈す。全体の半分以上が調査区外まで伸びるため、全容は知りえない。

出土遺物は、狭小な調査面積のため数は少ないが、坏身、坏蓋、高坏、甕、甕、埴などを確認した。大部分は SD - 02 周溝付近から出土し、7 のみ石棺内上層からの出土である。第 76 図 1 ~ 4 は高坏である。1 は口径 13.0cm、高さ 9.3cm、脚端部径 9.4cm を測る。カエリは直立し、口唇部直前で若干外反する。口唇部内面は段を有す。脚部は 3 つの方形透かしを有す。坏部は内外面ともに回転ナデを、外面は中ほどまで回転ヘラケズリを施す。2 は口径 13.0cm、高さ 9.7cm、脚端部径 9.2cm を測る。カエリは直立し、口唇部直前で若干外反する。口唇部内面は段を有す。脚部は 3 つの方形透かしを有す。坏部は内外ともに回転ナデを、外面は不明瞭であるが、中ほどまで回転ヘラケズリを施す。3 は口径 12.8cm、高さ 9.1cm、脚端部径は復元で 10.5cm を測る。カエリは直立し、口唇部直前で若干外反する。口唇部内面は段を有す。脚部は 3 つの方形透かしを有す。坏部は内外ともに回転ナデを、外面は不明瞭であるが、中ほどまで回転ヘラケズリを施す。4 は坏部しか現存していないが、口径 13.0cm を測る。カエリは直立し、口唇部直前で若干外反する。口唇部内面は段を有す。坏部は内外ともに回転ナデを施し、外面は不明瞭であるが、中ほどまで回転ヘラケズリを施す。5 は坏蓋である。復元口径は 12.9cm を測る。内外面ともに回転ナデにより整形を行う。6・7 は坏身である。カエリは、ともにほぼ直立するが先端部を欠損する。6・7 ともに回転ナデで整形が行われ、外面は中ほどまで回転ヘラケズリが施される。8 は甕である。8 は口径 10.8cm、高さ 10.5cm、胴部最大径は 11.8cm を測る。ラッパ状に開く口縁を有し、底部は丸底を呈す。口縁部は二重口縁を呈し、上方、下方ともに細かな波状文を有す。体部には 2 条の沈線を巡らせ、その間に波状文と穿孔を有す。調整は内外面ともに回転ナデにより整形されている。底部と頸部に明瞭な接合の痕跡がうかがえる。9 は壺の口縁部と思われる。口唇部を肥厚させ、その下方に、やや幅広の沈線を、さらに下方に波状文を巡らせる。調整は内外面ともに回転ナデにより整形されている。10 は甕頸部である。頸部径は復元で 14cm を測る。全面をナデにより整形し、胴部は不明瞭であるが、叩きを施す。11 は埴である。口径 5.9cm、高さ 6.2cm を測る。口縁部は、ほぼ直立するが、若干外方に傾く。底部は若干の面を有すが、ほぼ丸底を呈す。外面はタテハケ後ナデ、口縁部内面はヨコハケ、胴部内面はナデが施される。

第 77 図 1 ~ 5 は石棺内出土遺物である。1 は鉄剣である。全長 56.0cm、頭部長 42.0cm、茎長 14.0cm、刃幅 3.4cm、茎幅 2.0cm、刃部幅 0.4cm を測る。茎部には 2 箇所目の釘穴を持つ。剣身の断面は不明瞭ではあるが、凸レンズ状を呈す。表面には部分的に木質が残る。2 は大刀である。鋒直前で欠損し接合しないが、残存全長 84.0cm 以上、刃幅 3.2cm、刃部厚 0.6cm を測る。剣身は直刀で反りはなく、茎部には 1 箇所目の釘穴が確認できるが、錆の付着がひどく、残りの部分での釘穴は確認できない。関部は若干欠損しているが、形状はほぼ想定できる。部分



第 77 図 1 号石棺内出土遺物 (1・2 : 1/4、3 : 1/2、4・5 : 1/1)



第78図 第2調査区遺構配置図（1/100）

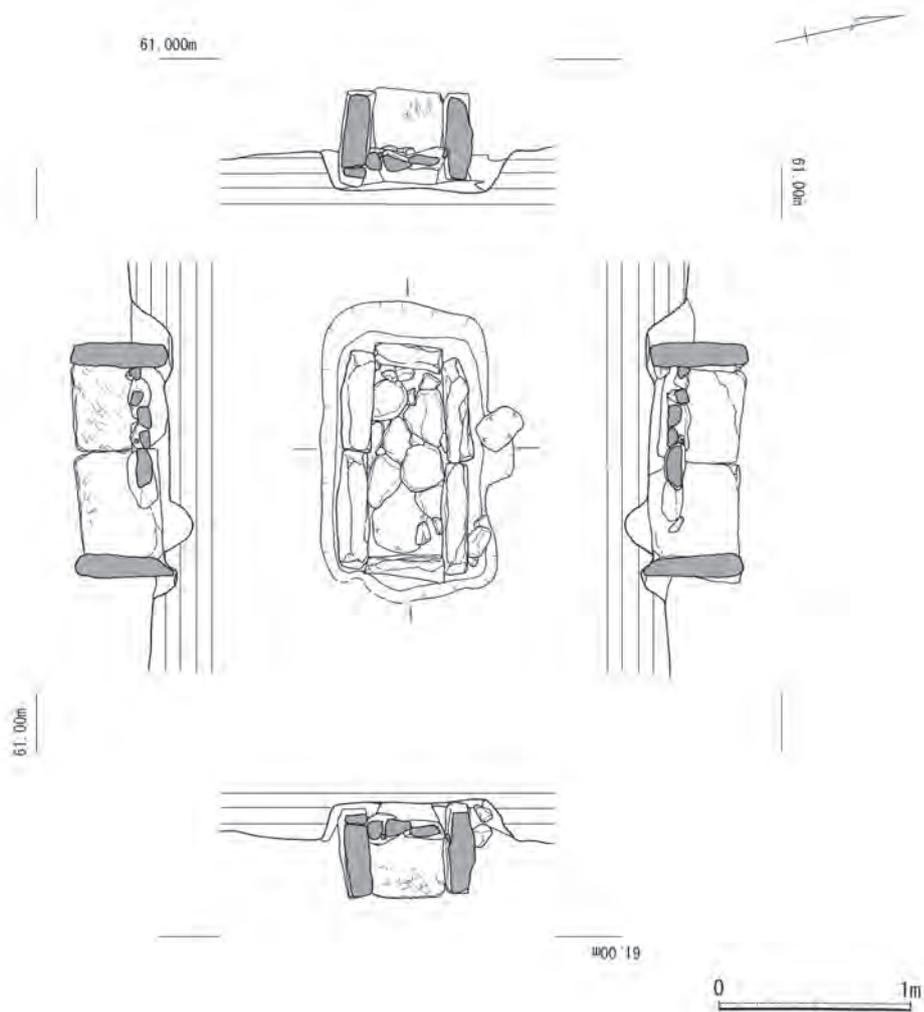
的に木質を確認することができ、茎部には人骨が付着し埋葬時の様相を想定することができる。X線撮影による確認を行ったが、象嵌等は確認できなかった。3は鍛造の袋状鉄斧である。全長11.2cm、刃部幅6.2cm、袋部の直径3.3cmを測る。袋部は楕円形を呈し、刃部に至る肩部が張る。刃部は使い減りのためか、若干斜めになる。4・5は滑石製の小玉である。4は直径0.5cm、孔径0.2cm、最大厚0.2cm、重量0.05gを測る。全体的に扁平であり、2面で顕著な平坦面がみられる。5は直径0.5cm、孔径0.2cm、最大厚0.25cm、重量0.05gを測る。全体的に丸みを帯びた形状を呈す。色調はともに灰白色を呈する。2点ともに石棺内部から持ち出した埋土を精査し、確認したものであり、正確な出土位置は不明である。

（3）第2調査区

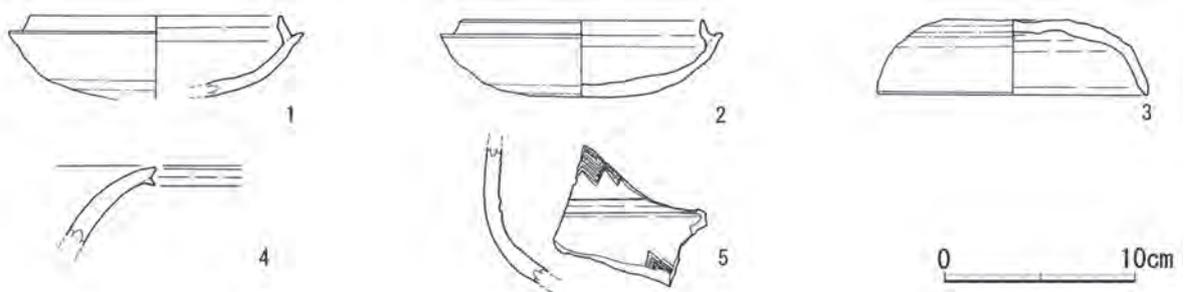
調査の結果、第2調査区からは小児用と考えられる組み合わせ式の箱式石棺を検出した。その他周溝等の外部施設は検出することができなかった。

（4）2号石棺

主体部は、主軸をN-103-Wに向けた組み合わせの箱式石棺である。法量は長軸1.2m、短軸0.7m、高さ0.5mを測り、頭位に向かい若干広がる。棺は6枚の約0.1mを測る肉厚な凝灰岩質安山岩を使用した板状の割石を壁側に2枚ずつ、両小口壁に1枚ずつ立て並べている。石棺の蓋は、1号石棺と同様に検出時にすでに無く、棺内部に腐植土が流入している。棺材は、ほぼ垂直に立てられる。壁面棺材は長方形を呈す。両小口棺材は逆台形を呈し、下方では壁面棺材との隙間が目立つ。1号石棺と同様に粘土目張りなどの隙間埋めは確認されない。棺内部は、赤色顔料が塗布され、床面には、拳大から人頭大の扁平な礫を敷き詰める。一部木の根による攪乱を受け、敷石が跳ね上がり元位置の確認はできない。



第79図 2号石棺 (1/40)



第80図 第2調査区出土遺物 (1/4)

石棺墓抗は長方形を呈し、長軸 1.6m、短軸 0.7m を測る。壁面は垂直に掘り込まれず、下方にいくにしたがい内面に傾斜する。底面は両小口部に窪みを有し、棺材の下受けを形成する。石棺に付随する周溝等の検出はできず、外部施設の有無は不明である。

出土遺物は第 80 図 1～3 まだが石棺内から出土した。しかし、石棺内部の木の根による攪乱を受けた場所からの出土なので、元位置の確認はできなかった。

第 80 図 1・2 は坏身である。1 は口径 15.6cm、高さ 4.5cm、2 は口径 15.0cm、高さ 4.1cm を測る。1・2 ともに、若干内側に傾斜するカエリを有し、受部は上向きに引き出される。調整は内外面ともに回転ナデで整形し、外面中ほどまで回転ヘラケズリを施す。3 は坏蓋である。口径 14.2cm、高さ 4.0cm を測る。口縁端部は丸みをおびる。調整は回転ナデ後に外面中ほどまで回転ヘラケズリを施す。4 は甕の口縁であると思われる。破片なので法量は不明である。口縁端部は三角形を呈し、下位に三角突帯が 1 条巡る。5 は破片なので器種、法量は不明である。中位に小さな突帯が 2 条巡り、その上下にヘラ描きの波状文を施す。

小結

これまで春木芳元遺跡は、縄文時代から奈良時代までの複合遺跡として認識され、多くの遺構・遺物が出土してきた。今回の調査では、これまで別府市内で類例をみない 5 世紀後半から 6 世紀中頃に比定される石棺と、それに伴う遺物が出土し、別府市古墳時代の空白期を埋める資料となった。

1 号石棺は、長軸 2.3m、短軸 1.0m を測り、頭位を東側に向ける。頭位には枕状の高まりがあり、棺内部からは鉄剣、鉄刀、鉄斧、小玉が出土した。鉄剣には人骨が付着し、出土位置と合わせて埋葬当時の状況が考えられる。一方、2 号石棺は長軸 1.2m、短軸 0.7m を測り、頭位を東側に向ける。平面形は 1 号石棺の約半分程度であり、木の根による攪乱を受けているため元位置の確定はできないが、棺内部から、坏身、坏蓋が出土している。両石棺ともマウントは確認できなかったが、1 号石棺の方からは隅丸方形の周溝を検出し、古墳の形状を類推することができると考えられる。

1 号石棺が比定される時期は、周溝付近で出土した須恵器から 5 世紀後半と考えられ、2 号石棺は若干の不安要素はあるが、石棺内から出土した須恵器から 6 世紀中頃に位置付けられると考えられる。1 号石棺と 2 号石棺を比較すると、規模の他、棺内床面や壁側棺材端部の形状、比定される時期などの差異がある。1 号石棺では、床面は粘質土を敷き詰め、壁側棺材端部を打ち欠いているのに対し、2 号石棺では、床面に人頭大の扁平石を敷き詰め、壁側棺材は方形に加工されている。2 号石棺の小口については、逆台形を呈し、石棺墓抗には掘り戻されたような乱れもないことから、築造当初から上下逆に設置していたものと考えられる。しかし、それに類する検出例は見当たらず、石棺下方では壁面棺材との隙間も目立つ設置方法となり理解に苦しむ。石棺の石材や厚さ、全面ににわたり確認できるノミ痕、方位等は両石棺とも、ほぼ同様であり類似点も多く、同一志向のもとで築造されたことがうかがえる。

棺材に使用されている石材は肉眼観察ではあるが、両石棺ともに凝灰岩質安山岩と考えられ、整形や調整が容易にできる石材を使用している。石切場等は不明であるが、実相寺山で同質の石の露頭がみられることや、遺跡からの距離等を考えると、実相寺山近辺で切り出し、整形を行い、

現地まで運び最終調整を施し設置したものと考えられる。

また、第1調査区からは、その他の溝も検出しており、周辺部に複数の同様な遺構が存在する可能性が高く、今後の調査に期待が持たれる。

表7 春木芳元遺跡古寺地区遺物観察表

(単位: cm, g)

挿図 番号	遺物 番号	種別	器種	口径	器高	底径	裾径	天井 部径	色調	胎土	備考
76	1	須恵器	高坏	13.0	9.3		9.4		灰色	石英・長石	
76	2	須恵器	高坏	13.0	9.7		9.2		灰色	石英・長石	
76	3	須恵器	高坏	12.8	9.1		(10.5)		灰色	石英・長石	
76	4	須恵器	高坏	13.0					灰色	石英・長石	
76	5	須恵器	坏蓋	(12.9)					灰色	長石	
76	6	須恵器	坏身						灰色	長石	
76	7	須恵器	坏身						灰色	長石	
76	8	須恵器	甕	10.8	10.5				灰色	石英・長石	外面に波状文
76	9	須恵器	壺						灰色	長石	外面に波状文
76	10	須恵器	甕						灰色	長石	
76	11	土師器	埴	5.9	6.2				茶褐色	長石・角閃石	
80	1	須恵器	坏身	(15.6)					灰色	石英・長石	
80	2	須恵器	坏身	15.0	4.1	5.4			青灰色	石英・長石	
80	3	須恵器	坏蓋	14.2	4.0			5.6	青灰色	石英・長石	
80	4	須恵器	甕						灰色	極小の砂粒	
80	5	須恵器							灰色	長石	外面に波状文

挿図 番号	遺物 番号	器種	全長	頭部長	刃幅	茎幅	刃部厚	備考
77	1	鉄剣	56.0	42.0	3.4	2.0	0.4	1号石棺内出土 X線により目釘穴2箇所確認
77	2	鉄刀	84.0以上		3.2		0.6	1号石棺内出土 X線により目釘穴1箇所確認 骨付着
77	3	鉄斧	11.2	6.2				1号石棺内出土

挿図 番号	遺物 番号	石材	器種	最大径	孔径	最大厚	重量	備考
77	4	滑石	小玉	0.5	0.2	0.2	0.05	1号石棺内出土
77	5	滑石	小玉	0.5	0.2	0.25	0.05	1号石棺内出土



第1調査区全景（北から）



1号石棺（北から）



1号石棺（西から）



第1調査区北壁（南から）



1号石棺鉄器出土状況



第2調査区全景（北から）



2号石棺（西から）



2号石棺完掘状況（北から）



2号石棺北側土層（東から）



1号石棺取り上げ状況

